

# 聖メアリー・ラドクリフ・アンド・テンプル中等学校

( St Mary Radcliffe and Temple School )

訪問日時：平成 15 年 11 月 5 日 ( 水 ) 13 : 40 ~ 16 : 20

説明者：ディヴィッド・マクレガー校長 ( Mr . David Mcgregor )

## 事前調査

- 1 名称 聖メアリー・ラドクリフ・アンド・テンプル中等学校  
( St Mary Radcliffe and Temple School )
- 2 所在地 Somerset Square Bristol BS1 6 RT  
電話 0 1 1 7 3 7 7 2 1 0 0
- 3 代表者 校長 ディヴィッド・マクレガー氏 ( Mr. David Mcgregor )
- 4 概要等

ブリストルのほぼ中心にあるや総合制中等学校 ( コンプリヘンシブ・スクール ) で、11 歳から 19 歳までの約 1,200 人 ( 内、約 300 人が 16 歳以上のシックスフォーム ) の生徒が在籍し、教職員数は 125 人 ( 85 人の教員と 40 人の職員 ) である。イングランド国教会の学校で、生徒はブリストル及びその近郊から通学している。

2000 年、教育水準監査局 ( OfSTED ) からピーコン・スクール ( 最優秀校 ) の資格が与えられ、生徒の学習成績がよい要因として、校長のリーダーシップ、良質な教育、保護者からの強力な支援体制、生徒の品行のよさと学習態度が挙げられている。

また、教育の質はほとんどの教科で優れている。その要因としては、内容が広範囲に渡り、高い将来性を見据えた教育であり、計画性や生徒管理に優れていることが挙げられる。また、校長は優れたリーダーシップを発揮し、学校の発展に対する明確なビジョンを持って取り組んでいる。

## 調査項目

- 1 中等学校改革について
- 2 学力向上の取り組みについて
- 3 学校理事会について

## 訪問調査

- 1 中等学校改革がもたらしたものについて

5 年前には、コンプリヘンシブ・スクール ( comprehensive schools ) は、特に都市部では失敗と言われていた。英国では私立の学校 ( private school ) 地域によっては優秀な生徒だけを受け入れるグラマー・スクール ( grammar schools, selective schools ) 等の中等学校 ( secondary schools ) があるが、保護者が比較的裕福で比較的優秀な生徒が集まる学校や、それとは反対に、低所得層の生徒や学力の低い生徒を多くかかえる学校など多様である。

そこで、政府と地方自治体はすべての子どもの学力レベルを上げることに焦点を当てるようになり、たとえば教育課程において、Key Stage 3 ( 11 歳から 14 歳まで ) の子どもたちにもどのように教えるか等について、教師にアドバイスしてきた。そして、初等中等教育改革を進めるなかで、国際的に見てもイギリスの子どもたちの学力は向上してきた。

## 2 学校の現状と今後の方向について

本校は英国国教会のコンプリヘンシブ・スクール( comprehensive schools)であり、子どもたちは少なくとも3年間は教会に通わなければならないことになっている。通常のコンプリヘンシブ・スクールだと、地域の子もたちを預かることになるが、本校ではこのような事情から、ブリストルの近郊を含む広い地域から生徒が来ている。

ブリストルではイギリスの国教会の学校はこの学校だけで、本校は学力的にも成功し、75%以上がG C S E (中等学校修了一般資格)において、5科目でよい成績を上げている。(この数値の全国平均は50%であり、ブリストル地域の平均は36%である。)

学力向上とともに、市民教育、つまりよい市民になってもらうことの教育にも力を入れており、互いに敬意を持つことに焦点をあてている。また、来年度から歴史と地理といった人文学に特別に重点をおいていく予定である。ブリストルの他のコンプリヘンシブ・スクールは、スポーツや理科、芸術といった他のことに重点をおいている学校もある。

## 3 カリキュラムについて

11~13歳の生徒はKey Stage 3と呼び、ナショナルカリキュラムに沿って教えている。これは全国同じで、国語、数学、理科、歴史、地理、外国語、技術家庭、IT、体育、音楽、美術、宗教教育である。

14~15歳ではコア・カリキュラムを教え、そのほか選択科目や職業関連の科目も教える。16歳で義務教育を終えて、他の上級学校に行くことができるし、あるいはシックス・フォーム(第6学年 Sixth Form)と呼ばれる進学課程に進むこともできる。あるいは就職することも可能である。本校では、95%の生徒が、残って継続教育を受けるか、進学していく。(この数値の全国平均は70%である。)

16歳からはAレベル試験(大学入学のための試験)に備えての学習をすることになるが、本校では35科目を教えることができる。collegeといわれる機関に進学する生徒もあり、これはどちらかというとな職能関連の学習をしている。大学進学のためにこの学校に残った生徒たちは、2年後にはほとんどが進学していく現状である。

## 4 ビーコンスクールについて

本校は、ビーコンスクール(最優秀学校)の資格を2000年に与えられた。これは試験の結果が全国レベルでも非常に高かったからであり、ビーコンスクールになることによって、年間4万ポンド(約800万円)を与えられた。

また、他校の教員への学習指導についてのアドバイスも行っている。



〔調査団に説明する生徒〕



〔政府承認のビーコンスクール・プレート〕

## 5 教育水準監査局(OfSTED)の評価について

政府は8年前に教育水準監査局(OfSTED)による監査を導入した。監査官は学校に1週間滞在し、すべての教師について授業を3時間ずつ見学する。そして、7段階で教師の授業を評価し、リーダーシップや管理運営方法、また、学校内の人々の行動も観察するとともに、value for money(予算で一番最善のことを達成できているかという観点)から学校の様子を見ていく。生徒たちの学力も検査し、試験結果も考慮の対象とし、その上で他の学校と比べた全体的な評価をする。

監査の後に相対的な評価の報告書が出され、その報告書で弱点があると認められた場合は、学校はその改善を目指す行動計画を出さなければならないことが法律で決められている。本校はすべてよいという高い評価であったが、3カ所の弱点が指摘された。

1つ目は建物収容能力のことであった。本校の対応として、他の建物を購入し、シックス・フォーム(sixth form)向け校舎として準備している。

2つ目は評価の仕方に統一性がないということであった。それへの対応として、コンピュータを導入し評価の仕方を校内で統一した。

3つ目の弱点はITの使い方が弱いということであった。これには、コンピュータを200台導入し、技術者を1名雇って、教師に研修を行うことで対応した。

これらの対応がどのような改善をもたらしたかということは、新年明けの監査で明らかになってくる。

## 6 コンプリヘンシブ・スクールとしての特色について

コンプリヘンシブ・スクールは、教育課程に特色を持つスペシャリスト・スクール(specialist schools)と互いに競合している。たとえば、スペシャリスト・スクールであることで余分に財源が与えられるからである。本校の場合は、教育課程の人文学に重点を置いている。本校で人文学のspecialistをつくるということで立場を確立することができれば、年間さらに14万ポンド受けることができることになっている。また、英国国教会の学校ということで他とは違う教育を提供している。生徒たちは礼拝に行くし、教会をよく訪れる。

各コンプリヘンシブ・スクールがそれぞれ違いを出しているが、実際にはナショナル・カリキュラムが全国統一なので、ある程度は似てしまう面もでてくる。

## 7 学力補充の取り組みについて

学力別のコースを設け、レベルに合った授業を受けることができるようにしている。また、学力の低い生徒に対しては特別のコースを設け、職能コースや宗教教育のコース、近代外国語のコースでの学習もする。

また、授業の目標を明確に定め、この目標を生徒も共有し、授業に取り組む。そして授業の前にはできなかったことが、授業の終わりにきちんと達成できているかどうかをチェックするなど、teachingとlearningの両方を向上させているかどうかを、教頭にあたる者が監督している。さらに、教頭にあたる者とカリキュラムのチームリーダーが学校の様々な戦略について懇談をして、次なる手立てを考えている。



〔図書室でのグループワーク〕

## 8 進学のための特別な指導について

16歳の段階では、職能コースに進むか、あるいは学問のコースに進むかということで多くのアドバイスをを行う。キャリア・ティーチング（職業教育）のプログラムを組むとともに、「コ

ネクション」という団体から特別なアドバイザーを迎え、生徒一人ひとりと個人面談をし、詳しいアドバイスを加える。

18歳の段階では、大学選択という難しい問題があり、どの学科に進みたいかということを決断しなければならないし、自分の希望する一番良い大学に学力的に入れるかという問題がある。入学が困難な大学からそうでない大学まであり、大学の選択に生徒たちが正しい決断を下せるように努力している。

## 9 学校理事会について

本校には21人の理事がいて、校長1名、教師の中から2名、サポートスタッフから1名、保護者から5名、地方自治体からは2名（政治家等）が選出されている。本校の場合、残りの理事はイギリス国教会が選出する。他の学校では実業界や大学から選出される。地方教育当局(LEA)の職員が理事会に臨時的に出席することはあるが、LEAから選ばれる理事として出席するのは政治家であることが多い。理事長は21人の理事が毎年互選し、誰でも(校長を除く)理事長になる可能性があり、本校の場合、現在は教会の代表の一人が理事長になっている。

## IV まとめ

学校訪問到着時に、火災警報器が鳴り、生徒全員が校庭に緊急避難するという場面に遭遇した。幸いにも誤作動で事なきを得たが、1200名の生徒が整然と行動していたことや、4名の生徒が2組に分かれて、私たち訪問者を親切に、また熱心に学校内を案内してくれた姿からも、ビーコンスクールとしてのこの学校の教育の質の高さ・優秀さや徹底した危機管理のあり方を目の当たりに見ることができた。

また、校長として大切なこととして、校長が熱心な人柄で教師の側に立ってサポートすること、学校のため戦略的なビジョンをたてその実現に努めること、そして、質のいい教員を任命することと語り、強いリーダーシップを発揮するディヴィット・マクレガー校長の姿が印象的で、学ぶことの多い訪問でした。



【校長先生及び案内役生徒4名とともに】



【学校玄関の前で】